

ヘミングウェイの「小切手簿」 —キューバ蔵書研究からわかる作家の家計—

柳沢秀郎（名城大学 外国語学部）

YANAGISAWA Hideo

要約

キューバのヘミングウェイ博物館には、かつてこの作家が所有していた膨大な数の書籍や雑誌が保管されている。筆者は 9 千点以上におよぶこれらのアイテムの中の「書き込み」(marginalia) をデジタル化し、検索可能なデータベースの構築を進めてきたが、その中に 1940 年代に書かれたヘミングウェイ直筆の「小切手簿」がある。この資料の判読と分析から、このころのヘミングウェイの銀行預金、前妻の子供たちへの教育費、さらに所得税の分割払いや出版社からの前借りなど、家計に関わるさまざまな実生活が垣間見える。狩猟や海釣り、豪華なパーティーなど私生活の豪胆なイメージとは異なる、家計における誠に堅実なヘミングウェイの一面を明らかにした。

The Hemingway Museum in Cuba preserves more than nine thousand paper artefacts, such as books, magazines, and note books that Hemingway owned and used. The author has digitized marginalia in them to make a searchable database and, while doing so, discovered the “record for checks” (the note book that Hemingway used for keeping a record of his bank checks). By analyzing Hemingway’s handwritten notes in the record for checks, it is possible to understand how he managed his household finances, such as bank deposits, financial support for his relatives, and the payment of income tax. Although Hemingway is popularly considered to have lived an audacious lifestyle, and so it is likely that some would assume he was a man careless about his household finances, Hemingway actually took meticulous care with his financial management.

キーワード：ヘミングウェイ，書き込み資料 (marginalia)，小切手簿

1. はじめに

アフリカでの狩猟体験を綴った『アフリカの緑の丘』(*Green Hills of Africa*, 1935)の中で、作家をダメにしてしまうものは何かと尋ねられたヘミングウェイは、「政治、女、酒、金、そして野心。それから政治、女、酒、金、野心の欠如だ」と答えている。この何とも歯切れの悪い言葉でヘミングウェイが示唆しているのは、おそらく「成功している作家はこれらを程よく持ち合わせているものだ」ということなのであろう。なるほど、「野心」、「政治」、「女」、「酒」のいずれも、ヘミングウェイ自身とその文学には欠くべからざる要素であることは誰もが認めるところであろう¹。しかしながら、アフリカ長期滞在での狩猟や自家用船を繰り出してのカリブ海フィッシングといった豪胆なイメージからか、「金」という視点は写真資料や伝記資料に散見される知人を招いての豪華なパーティーの印象にかき消されてしまい、「家計」という極めて実人生的な視点でヘミングウェイが論じられることはほとんどなかったように思われる。

ヘミングウェイの生前の家計を知る資料としては、ニューヨーク・ライブラリーに所蔵されている2冊の「銀行預金通帳」(bank deposit book) (Heslip, P., 2011, n.p.)、およびボストンの JFK ライブラリーでのみ閲覧可能なキューバ寄贈のデジタルアーカイブに含まれる「家計簿」(household finances) や「法律・財務書類」(legal and financial documents) などがある²、いずれもタイプ文書でありヘミングウェイ直筆の資料ではない。一方、本論で扱うキューバの博物館所蔵の「小切手簿」はヘミングウェイがノートにしたための直筆の資料であり、彼の金銭面の足跡をたどる意味で、その資料的価値はより高いと言ってよい。筆者が博物館との共同プロジェクトを通して入手したヘミングウェイ直筆のこのノートには、戦後のヘミングウェイによる出金のようなすが細かく記録されている。本稿の目的は、キューバのヘミングウェイ博物館資料に含まれているヘミングウェイ直筆の「小切手簿」の判読と分析を通して、私生活における豪胆なイメージとは異なるヘミングウェイの金銭面における堅実な一面を明らかにすることにある。そこで、ヘミングウェイの作家転身期から1930年ごろまでの家計を精査し、扶養と納税の問題を指摘する。次いでこの二つの問題に焦点を当てながら、ヘミングウェイの「小切手簿」に秘められた作家の実人生の一端を読み解いてみたい。

2. 見習い作家ヘミングウェイの家計

ヘミングウェイと言えば成功したアメリカ作家の筆頭にあげられることもあるが、伝記を紐解くと、その経済状況は決して平坦なものではないことがわかる。もっとも貧苦を強いられていたパリの作家修行時代、次いで父の自殺によって生じた実家の不動産税の支払い義務、さらに度重なる離婚の度に発生する慰謝料、および離れて住む子供たちへの養育費など、その生涯は常に家計の問題と共にあった。

作家への転身を図っていた 1920 年代前半の最貧時代を、ヘミングウェイは回顧録『移動祝祭日—縮刷版—』(*A Moveable Feast: The Restored Edition*, 2009) の「空腹は好き修行だった」(“Hunger Was Good Discipline”) と題する章の中で明らかにしている。最初の妻ハドリーと生まれたばかりの長男ジョン (John “Jack”) とパリ生活を送っていたヘミングウェイは、安定したジャーナリスト業を辞め、作家への転身を図る。ヘミングウェイは常に空腹に苛まれながらも、なけなしの金でパリの美術館を巡り、馴染みの書店 (Shakespeare and Company) で女店主シルビア・ビーチ (Sylvia Beach) の施しを受けながら作家としての感性を磨いていた (Hemingway, E., 2009, pp. 66-72)。

1924 年にはたったの 1100 フラン (約 1100 ドル)³ であったヘミングウェイの創作年収は (Baker C., 1969, p. 140)、短編の雑誌掲載が増えていくにつれて、以降生涯その額を増やし続けていくことになるのである。しかしながら、後に莫大な印税収入をもたらすことになる出版されたばかりの処女長編『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926) の印税は、当時離婚に同意してくれたハドリーに償いの意味を込めて全額譲渡する約束をしている (Baker C., 1969, p. 178)。依然として裕福とは言い難いこうした状況下、ヘミングウェイは二人目の妻となるアーカンソー州ピゴット (Piggot) の地主の娘ポーリーン・ファイファー (Pauline Pfeiffer) と 1927 年にフランスで結婚する。カトリック教徒であったファイファー家の意向でわざわざ改宗した甲斐もあり、ポーリーンが出した結婚通知には、実家の両親だけでなく資産家を輩出していたファイファー族から多額の祝い金が集まる (Baker C., 1969, p. 185)。特にこの姪を溺愛していた製薬会社経営者である叔父ガスタバス・ファイファー (Gustavus Pfeiffer) はポーリーンに巨額の信託基金から月々仕送りをし続け、ヘミングウェイ家の当時の家計にとって大きな助けとなっていた (Hemingway, E., 2015, pp. 570-571)。

1928 年 5 月末、ポーリーンの出産に伴って二人は妻の実家であるアーカンソー州ピゴットに 1 ヶ月ほど滞在し、その後キーウエストへと移り住むが、その間もさまざまな形で叔父ガスタバスの資金援助を受けている。このころ、『武器よさらば』の掲載料として 16,000 ドルの大金がはじめてヘミングウェイに入るが (Baker C., 1969, p. 199)、同じころ実父クラレンス (Clarence) の自殺によって突然家長となったヘミングウェイに、突如実家の不動産税の支払い義務がのしかかることになる (Baker C., 1969, p. 200)。母グレース (Grace Hall Hemingway) に宛てた 1929 年 2 月 20 日の手紙には次の記述がある。

... now please send me a list of the taxes and to whom they are to be paid and I will see they are paid at once. Now is an awfully bad time to sell Florida real Estate but I will pay the taxes until a good time comes for disposing of it. ... Land that sold for \$2,000 an acre during the boom is selling now for \$50⁰⁰ [...] But Dad [father]’s stuff—being city lots will always have a certain value.

I will continue to pay the taxes and we can sell it when the market is better... (Hemingway, E., 2015, p. 534)

ヘミングウェイは、父がフロリダ州に所有していた不動産⁴の売却を視野に、その売り時まで不動産税の支払いを肩代わりすることを母に申し出ている。実際、ヘミングウェイは翌月3月6日に500ドルの小切手を同封した手紙を母に送っているが、手紙には“Enclosed is a check for \$500⁰⁰ ... [I] will send you other checks as soon as Scribner's check goes through the bank” (Hemingway, E., 2015, p. 535) とあり、このころのヘミングウェイの仕送り資金は出版社のスクリブナー社⁵からの印税や原稿料を待たなければならなかったことがわかる。

3. 納税と被扶養者

これと時を同じくして、ヘミングウェイの手紙に頻出し始めるのが「所得税」(“income tax”)という単語である。1929年3月11日にスクリブナー社の編集者マクセル・パーキンス (Maxwell Perkins) に宛てた手紙の中の“Thanks ever so much for the income tax data” (Hemingway, E., 2015, pp. 549-550) を皮切りに、同年5月にイギリス人編集者ジョナサン・ケープ (Jonathan Cape) に宛てた手紙の中では次のように述べている。

If you know any way that this £200 can be kept from being reduced to £160 by income tax I would be glad to know it. I paid some \$500 tax by the states [U.S.] and have just been billed for \$100 more tax by the French and as I have a wife, two children, my mother, two sisters, and a brother at school dependent on me I do not think cheerfully of the idea of paying an additional \$200 in tax in England when I have no earned income but only advances which I owe to your goodself.” (Hemingway, E., 2018, pp. 12, 下線原文)

ヘミングウェイは、すでに国内外のさまざまな税金を支払った挙句、自分の妻子だけでなく、母と二人の妹、さらに学生である弟の世話もしなければならぬ状況下、せつかくの前金200ポンドが所得税によって160ポンドに減額されない方法はないかとケープに尋ねている。ヘミングウェイによるこうした所得税対策の教えを乞う文面は、1929年11月20日にアメリカの編集者パーキンスに宛てた手紙の中の次の記述にも認められる。

I wish there was someway I didn't have to pay income tax on that 20,000—there is no money in having to borrow money to pay income tax on money you never see! If you think of any way let me know. / PS. / On income tax I only get credit for 2 dependents because that is all I have under the one roof—In reality I have 9 dependents! (Hemingway, E., 2018, p.163)

興味深いことに、ヘミングウェイはここでも所得税対策が必要な理由として「被扶養者」(“dependent”)について言及している。2 人の被扶養者とは当時の妻ポーリーンとその息子のパトリックであるが、ここでヘミングウェイが意味している残りの 7 人には、母 1 人、妹 2 人と弟 1 人、そして離婚した前妻ハドリーと息子のジョン 2 人も含まれているものと思われる。こうした多額の所得税と扶養義務の問題は、その後のヘミングウェイの波乱の生涯に最後までついて回ることになるのである。

4. ヘミングウェイの「小切手簿」

キューバのヘミングウェイ博物館に残されている未公開資料の中にヘミングウェイの出金簿らしき資料がある。アイテム「15-1049」と分類されているこの資料は、見開きで縦横 20 センチのノート型をしており、100 頁にも及ぶその内部には明らかにヘミングウェイの筆跡で、出金額とその用途が万年筆らしきインクを用いてびっしりと書かれている。途中で分離しているため「No. 301」から始まるこの資料の第 1 頁目を見てみよう (図 1、表 1)。

No.	Date	Bank	Purpose	Amount
301	March Second 1946	1st Nat Bank of Boston	Deposit	\$200.00
302	March Twelve 1946	1st Nat Bank of Boston	Deposit	\$200.00
303	March 12 1946	Mary Walsh	wedding p.	\$500.00

Guaranty Trust Company of New York

15 - 1049 - 1

図 1 アイテム「15-1049」1 頁

	No. 301 March Second, 1946 1 st Nat Bank of Boston Deposit	800.00
	No. 302 March Twelfth, 1946 1 st Nat Bank of Boston Deposit	800.00
	No. 303 March 12, 1945 Mary Welsh Wedding P. Destroyed	5000.00

表 1 アイテム「15-1049」の 1 頁の判読内容

「1946 年 3 月 2 日」(“March Second, 1946”) という日付で始まる上段、および中段に認められる「ボストン第一国立銀行へ預金」(“1st Nat[ional] Bank / Deposit”) という記述はこのノートに頻出することから、ヘミングウェイはこの銀行に定期的に一定金額を預金していたことがわかる。ヘミングウェイ御用達のボストン第一国立銀行は 1884 年から 1997 年までこの名称で存在していたが、その後の合併統合により改名を繰り返し、現在は「バンク・オブ・アメリカ」(Bank of America) の支社「ケネディ・プラザ」(Kennedy Plaza) となっている⁶。

下段には、「1946 年 3 月 12 日」(“March 12 1946”) という日付で、ヘミングウェイの 4 番目の妻となる「メアリ・ウェルシュ」(Mary Welsh) のフルネームとともに「ウェディング・P.」(“Wadding P.”)、さらに出金欄に 5,000 ドル⁷ が確認できる。妻メアリーの伝記によれば、1946 年 3 月 14 日にヘミングウェイは 20 人ほどの友人を招きキューバのハバナで結婚パーティーを開いていることから (Hemingway, M., 1976, p. 210)、この出金はそのための経費だったとみて間違いない。注目すべきは鉛筆らしきもので書かれた「破棄」(“Destroyed”) という追記である。この単語が資料内に 4 か所もある点、また一方で、わざわざ「現金」(“cash”) と付記されている項目も複数確認できることから、このノートは基本的に「小切手簿」として使われていたと推察される。したがって、資料下段の「No. 303」の記述からは、ヘミングウェイがメアリーとの結婚パーティーの費用に切っておいた 5,000 ドルの小切手が、何らかの理由で使われずに済み、結果破棄されたということを意味している。

続いて、同アイテム 5 頁目を見てみよう (図 2、表 2)。

表 2 アイテム「15-1049」5 頁の判読内容

No. 314	110.00
April 23, 1946	
55.00 John H.N. Hemingway Trust Fund	
55.00 month [?] E.H. on budget.	
Bumby's education month May – Next check due June 1 st .	
No. 315	110.00
June First, 1946	
JHN Hemingway	
University for June.	

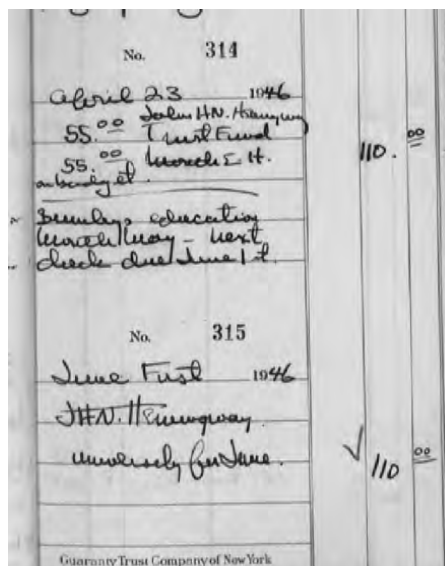


図 2 アイテム「15-1049」5 頁

「No. 314」の欄の「1946 年 4 月 23 日」(“April 23, 1946”)の下に認められる “John H.N. Hemingway”、その下の「バンビ」(“Bumby”：ジョンのニックネーム)、下段 “JHN Hemingway” はすべて一番目の妻ハドレーとの間に設けた先述の長男ジョンを指す (Trogdon, R. W., 1999, p.5)。また「信託基金」(“Trust Fund”)、“University”という記述から、ヘミングウェイが当時 23 歳の息子の養育費と大学費用とを信託預金に小切手を切る形で負担していたことがわかる。

前妻たちとの間にできた子供たちへのこうした養育費負担の記述は他にも認められる (図 3、図 4)。

表 3 アイテム「15-1049」68 頁中段の判読内容

No. 503	250.00
August 24, 1948	
Patrick Hemingway	
(support and education)	

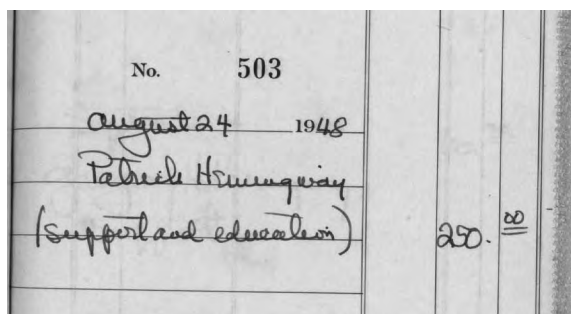


図 3 アイテム「15-1049」68 頁中段

表 4 アイテム「15-1049」 69 頁中
段の判読内容

No. 506	100.00
September 4, 1948	
Gregory H Hemingway	
support	

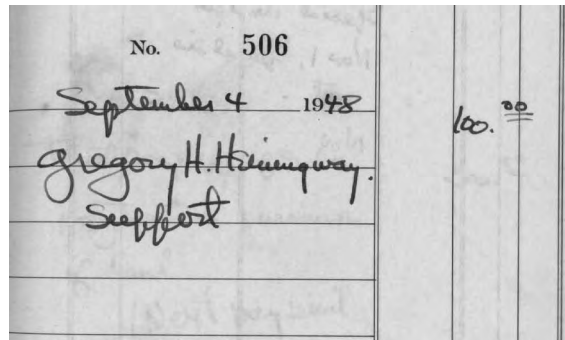


図 4 アイテム「15-1049」 69 頁中段

表 3、表 4 の判読内容からわかるように、ヘミングウェイは二人目の妻ポーリーンとの間に生まれ、離婚後別居状態にあった次男パトリック (Patric) と三男グレゴリー (Gregory) への養育費や教育費として、それぞれ 250 ドルと 100 ドルの小切手を切っている。

さらに、こうした経済的支援は血縁の有無に関わらず、ヘミングウェイの親族にも及んでいる (図 5、図 6)。

表 5 アイテム「15-1049」 72 頁下段
の判読内容

No. 516	300.00
December 19, 1948	
Support mother	
Grace Hall Hemingway	
(ill at Memphis)	
Payable to sister	
Mrs Ken[n]eth S. Mainland	
In Memphis Tenn.	

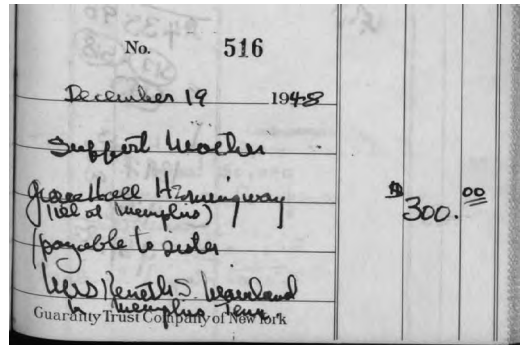


図 5 アイテム「15-1049」 72 頁下段

表 6 アイテム「15-1049」49 頁上段の
判読内容

No. 316	1040.00
June First, 1946	
Mary Hemingway	
Support her family	
April 1945 – May 1 1946	
\$80 per month.	

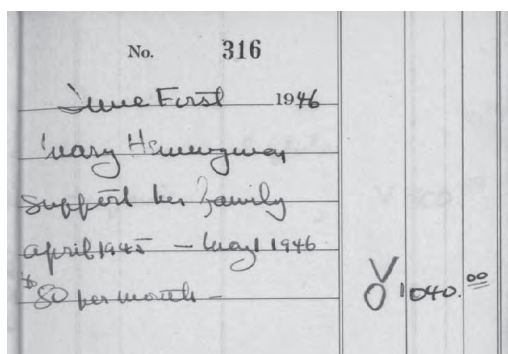


図 6 アイテム「15-1049」49 頁上段

表 5 には、実母のグレース (Grace) や結婚してケネス・メインランド婦人 (Mrs Kenneth Mainland) となった実妹マドレイン (Madelaine) への 300 ドル、また、表 6 には再婚した妻メアリーの親族に対する 1040 ドル (月額 80 ドル×11 か月分) もの経済的支援が読み取れる。

以上に見てきたように、少なくとも 1940 年代後半のヘミングウェイは実にさまざまな経済的支援を強いられていた。そして、このことは 1925 年ごろからヘミングウェイの書簡に現れ始めた先述の「扶養」の問題と通底する。成功作家として、すでに確固たる名声と富を手にしていたとはいえ、離婚と再婚を繰り返してきた 40 代後半のヘミングウェイの扶養負担は決して少なくはなかったと言ってよい。

5. 続く納税苦

ヘミングウェイの納税に対する苦慮は、先述したように、1930 年前後には確認できるのであるが、この問題は 1940 年代に入っても続いていた。ベイカーによれば、1941 年度に 137,000 ドルほどの所得があったヘミングウェイは、翌年 1 月に義務付けられたその所得税 (income tax) の支払いに備え、わざわざ税金用の口座を設け、そこに 85,000 ドルを貯め、さらに馴染みの出版社である先述のスクリブナー社に手紙で 15,000 ドルの個人貸し付けまで嘆願している (Baker C., 1969, pp. 370-371)。手紙の中でヘミングウェイは作家を苦しめる高額な納税義務を嘆いていたとされるが (Baker C., 1969, pp. 371)、ヘミングウェイの納税に関連し、「小切手簿」の次の頁に注目したい (図 7)。この見開き頁の左側 (49 頁裏面) には、複雑な計算のメモ書きが認められる。

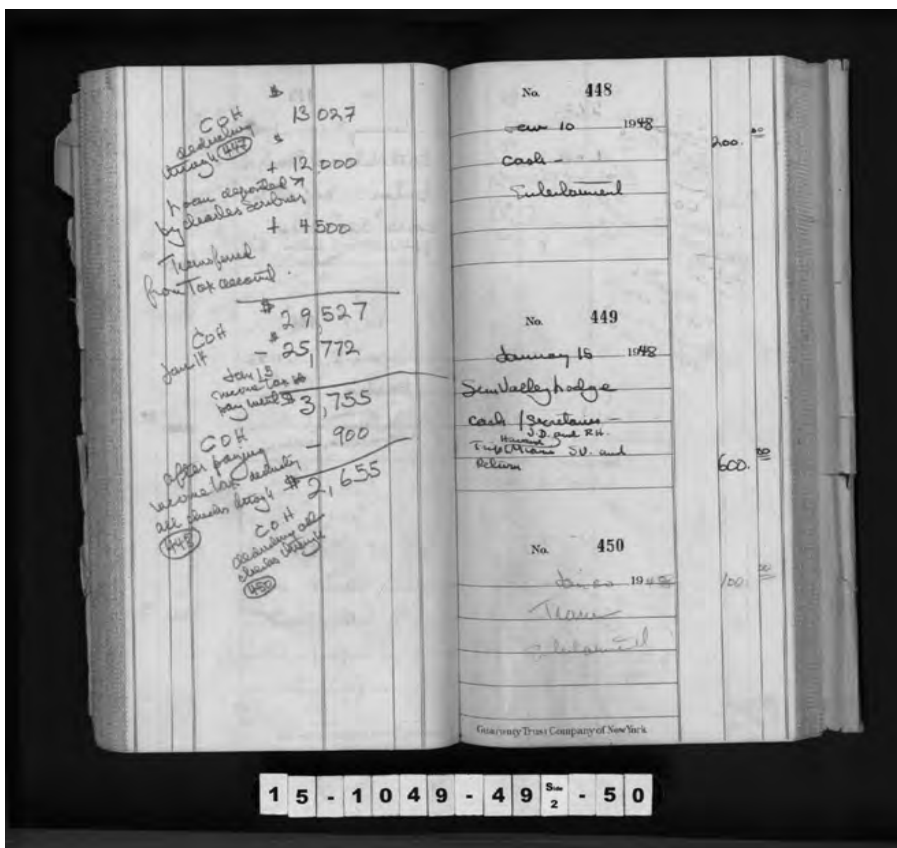


図 7 アイテム「15-1049」の 49 頁裏面と 50 頁

C.O.H. Deducting through 447	\$13,027	No. 448 Jan 10, 1948 Cash – Entertainment	200.00
Loan deposited by Charles Scribner	+ 12,000		
Transferred from Tax Account	+ 4500	No. 449 January 15, 1948 Sun Valley Lodge	600.00
C.O.H. Jan 14	\$29,527	Cash (Secretaries – J.D. and R.H.	
Jan 15 Income Tax payment	- 25,772	Trip Havana Miami SV. And Return	
C.O.H. after paying income tax deducting all checks through 448	\$3,755 - 900 \$2,655	No. 450 Jan 20, 1948 Tram[?] Entertainment	100.00
C.O.H. Deducting all checks through 450			

表 7 アイテム「15-1049」の 49 頁裏面と 50 頁の判読内容

実際、こうした計算の痕跡はこの小切手簿の複数の頁に及んでいるのであるが、特にこの頁が興味深いのは、このころのヘミングウェイがどのように納税に対処していたのかが明確に読み取れるからである（表 7）。表の上段左上冒頭の“C.O.H.”はおそらく“Cash on hand”「手持ち現金」の略語で、その金額が“\$13,027”と推察される。したがって、“Deducting through 447”と併せると「No. 447 までの差し引き残高」とわかる。これとまったく同じ記述と数値が前頁の計算式の最後にも認められることから、この冒頭の記述が前頁までの累計残高が 1,3027 ドルであったことを意味していることは間違いない。また、その下の“Loan deposited by Charles Scribner / +12,000”という記述からは、先述のペイカーによる 1941 年度の納税に関する記述と同様、1947 年度の納税の際にも、ヘミングウェイがスクリブナー社から 12,000 ドルを借りていたことを裏付けている。表の中段、そこに“tax account”「税金口座」からの“[\$]4500”を併せて“\$29,527”とし、“Jan 15”「1 月 15 日」には“income tax payment”「納税」として“[\$]25,772”の支払いに充てたと推察される。続く表の下段、その残高“\$3,755”に対して、“C.O.H. after paying income tax deducting all checks through 448”とあるように、見開き右頁の小切手 3 回分の合計“[\$]900”(200+600+100)をさらに差し引き、“\$2,665”という残高を導き出している。そして最後にヘミングウェイは、差し引いた 900 ドルに「No. 449」と「No. 450」の小切手支出も含んでいることに気づいたのだろう、改めて「450 までの全小切手支出の差し引き残高」“C.O.H. Deducting all checks through 450”と追記したのである。

ここで疑問に思われるのが、1941 年度のヘミングウェイが、税金対策口座に 85,000 ドルを準備していたにもかかわらず、1947 年度の納税金額がそれよりも少ない 26,000 ドル (“[\$]25,772”) ほどであるという点である。この疑問には同資料 60 頁上段「No. 478」の記述が答えている（図 8）。

表 8 アイテム「15-1049」の 60 頁上段の
判読内容

No. 478	9790.80
June 10, 1948	
Collector of Internal Revenue	
June 15 installment income tax according to Speiser - also payable Sept 15 - Dec 15 according to letter from Alfred Rice of June 8	

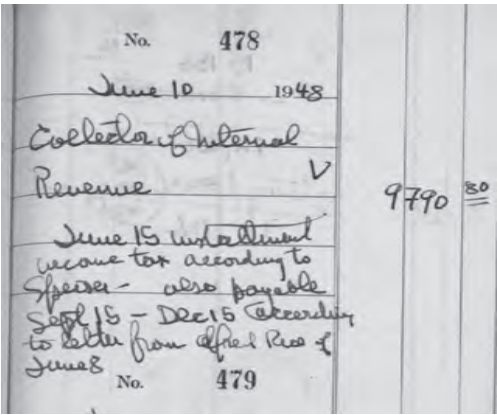


図 8 アイテム「15-1049」の 60 頁上段

表 8 の判読内容に明らかなように、1948 年 6 月 10 日に「国税徴収係」(“Collector of Internal Revenue”) に対して 1 万ドル (“[\$]9790.80”) ほどの小切手発行の痕跡が認められる。そして、その下に、「シュバイザー (Speiser) によれば、6 月 15 日に所得税分割払い (installment income tax)、6 月 8 日のアルフレッド・ライス (Alfred Rice) の手紙によれば、9 月 15 日、12 月 15 日も支払い可能」と記されていることがわかる。

ここに言及されているシュバイザーおよびライスとは、ヘミングウェイの顧問弁護士を務めていたモーリス・J・シュバイザー (Maurice J. Speiser) とアルフレッド・ライス (Alfred Rice) に違いない。1928 年にヘミングウェイとパリで出会う頃には「モダニスト芸術家の擁護者」としてすでに辣腕をふるっていたアメリカ人弁護士のシュバイザー⁸ は、1929 年から 1948 年までヘミングウェイの経済的アドバイザーを務めていた (Hemingway, E., 2018, p. 663)。1948 年 8 月 5 日に死亡していることから、ヘミングウェイがこれを記述しているころはまだかろうじて存命していたということになる。また、シュバイザーから顧問弁護士を引き継ぎ 1947 年からヘミングウェイの顧問弁護士を務めていたライスは、ヘミングウェイの死後も 1969 年まで妻メアリーの顧問弁護士としてヘミングウェイ作品の死後出版にも携わっていた (Hemingway, E., 1981, p. xxiii, p. 654)。

話を「所得税分割払い」に戻せば、ヘミングウェイはこの二人の弁護士から納税に関する助言を得て、少なくとも 1947 年度の所得税を分割で支払ったと言ってよい。だとすれば、1941 年の納税金額よりも少ないと思われた 1948 年 1 月納入の 2 万 6 千ドルという金額も、およそ 10 万ドルの税金を 4 分割した結果と推察される。4 番目の妻メアリーによれば、1946 年 3 月 14 日にキューバで行われた先述の二人の結婚パーティーに参加できなかったメアリーの両親に宛てて書いた手紙の中でヘミングウェイは「私たちは元気ですし、借金もせずちゃんと結婚しましたし、三月の分割納税もちゃんとやりましたし (“the March income tax installment paid”)、他のみんなもちゃんと養っていますし、健康で幸せです」(Hemingway, M., 1976, p. 211) と述べ、分割払いによる納税に触れながら、堅実な生活ぶりをメアリーの両親にアピールしている。

また、ヘミングウェイは 1950 年 9 月 9 日にスクリブナー社の社主チャールズ・スクリブナーに宛てた手紙の中で、“Could you advance me \$5,000 on the book and cable me that it has been deposited in the Guaranty Trust Co, Fifth Avenue Branch? I need it before Sept 15. Will pay back money I borrowed from out of royalties. Want to check with [Alfred] Rice when is the best time to do it.” (Hemingway, E., 1981, p. 713) と述べ、9 月 15 日までに必要だとして、5,000 ドルの前借りを嘆願している。ここで言及されている「9 月 15 日」という日付は、図 8 でヘミングウェイが弁護士ライスより学んだ「所得税分割払い」の支払い日とも合致する。また、後日印税から返済すると約束した上で、その「返済の最良のタイミング」をライスに相談する意思を伝えていることから、この前借りが単なる資金不足によるものではなく、何らかの節税対策を兼ねていた可能性は極めて高い。

以上に見てきたように、ヘミングウェイが税金を分割払いにしたり、節税のために前借りしたりしていた事実は、当時の作家の経済的状況に関しその伝記的空白を埋めてくれるだけではなく、これまで支配的であった私生活における作家の豪胆なイメージへの修正を促し、より堅実なヘミングウェイ像を提供することにもなる。

6. おわりに

本稿で扱ってきたアイテム「15-1049」は、これまでキューバのヘミングウェイ博物館内に保管されていたものの、公表も判読も分析もされてこなかった資料のひとつである。つまり、ヘミングウェイがこのような「小切手簿」をこまめに記録していたこと自体、日本はおろか海外のヘミングウェイ研究者にとっても知られざる事実である。また、その判読と分析からこの作家に大きくのしかかっていた親族への多大な経済支援、および巨額の納税への堅実な対応を読み取ることができた。

こうして得られた金銭面に関わるヘミングウェイの新たな一面はヘミングウェイ文学の創造にとってどのような意味をもつだろうか。ベイカーによれば、まだ作家業が軌道に乗る前の1925年下旬、ヘミングウェイは処女長編『日はまた昇る』出版前の改訂中に、友人の女性ダフ・トワイデンス (Duff Twysden) から3千ドルの支援を依頼されている (Baker C., 1969, pp. 156-157)。実際に貸したか否かは明らかではないが、複数の男性と奔放な交際をして散財していたダフの相談にのったヘミングウェイは、その際に交わした会話からダフの言葉を書き留め、『日はまた昇る』で同様の性格と経済状況を付与した上で、ヒロインのブレッド・アシュレー (Brett Ashley) に語らせている⁹。これは、ヘミングウェイが現実の金銭問題を自身の創作に活かした実例の一つであるが、本研究で明らかになったヘミングウェイの扶養や納税などの「家計」や「金銭授受」の問題に焦点を当てて作品を再読することで、ヘミングウェイ文学の新たな側面を導き出すことができるであろう。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 (JP25580069、JP26580059、JP16K13207) の助成を受けて実現したものである。キューバのヘミングウェイ博物館での研究活動の成果に基づいている。2014年から2017年の3年間におよぶ「蔵書の書き込みデジタル化プロジェクト」に協力いただいた博物館関係者に心より感謝申しあげる。

注

1. 波乱万丈の結婚歴や無類の辛党など、いささか度を越えた印象はあるものの、『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926) や『エデンの園』(*The Garden of Eden*, 1986) など現代に生きる男女の問題を、飲酒シーンを巧みに織り交ぜながら描いてきたこの作家の創作にとって欠くべからざるものであったことは容易に推察される。また、大恐慌期アメリカの貧乏白人を描いた『持つと持たぬと』(*To Have and Have Not*, 1937) やスペイン

内戦を背景にした『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*, 1940)などは、この作家の政治的関心の表れと言ってよかろう。

2. “Household Finances”を参照。
3. 1926年のアメリカ人の平均年収は5,300ドルほどであった (Hemingway, E., 2015, p. lxx)。
4. ヘミングウェイの父クラレンス (Clarence Hemingway) はフロリダ州のセントピーターズバーグに6つの不動産を所有していた。(Hemingway, E., 2015, p. 535)
5. スクリブナー社は、ヘミングウェイ作品の出版にほぼ携わったアメリカの出版社。
6. *National Information Center “Institution History of Kennedy Plaza”*を参照。
7. 参考までに、1946年のアメリカの平均年収は2,500ドル、新築の平均価格が5,600ドルであった。*The People History*を参照。
8. ヘミングウェイの顧問弁護士を務め始める前年の1928年、シュバイザーは、ルーマニアの彫刻家コンスタンティン・ブランクーシ (Constantin Brancusi) の作品『空間の鳥』が工業製品とみなされ、高い税金が課せられそうになった裁判で、芸術家側に立って勝訴したことで、モダニスト芸術家の擁護者として知られている (Hemingway, E., 2018, p. 663)。また、ヘミングウェイの生前の蔵書リストにはシュバイツァーの著書 *Legal Rights of Performing Artists* が確認できる (Brasch, J. D., 1981, p. 193)。
9. ヘミングウェイは書き留めたダフの言葉の中の “It’s what we believe in in place of God” (Baker, C., 1969, p. 156) を『日はまた昇る』では “It’s sort of what we have instead of God” に置き換えてブレットに語らせている (Hemingway, E., 1926, p. 249)。

引用文献

- Baker, C. (1969). *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Scribner’s.
- Brasch, J. D., & Sigman, J. (Eds.). (1981). *Hemingway’s Library: A Composite Record*. New York: Garland.
- Hemingway, E. (1981). *Ernest Hemingway: Selected Letters*. C. Baker (Ed). Cambridge: Cambridge University Press.
- . (2011). *The Letters of Ernest Hemingway vol. 1. 1907-1922*. S. Spanier & R. W. Trogdon (Eds.). Cambridge: Cambridge University Press.
- . (2013). *The Letters of Ernest Hemingway vol. 2. 1923-1925*. S. Spanier & A. J. DeFazio III & R. W. Trogdon (Eds.). Cambridge: Cambridge University Press.
- . (2015). *The Letters of Ernest Hemingway vol. 3. 1926-1929*. R. Sanderson & S. Spanier & R. W. Trogdon (Eds.). Cambridge: Cambridge University Press.
- . (2018). *The Letters of Ernest Hemingway vol. 4. 1929-1931*. S. Spanier & M. B. Mandel (Eds.). Cambridge: Cambridge University Press.
- . (2009). *A Moveable Feast: The Restored Edition*. Hemingway, S. (Ed.). New York: Scribner’s.
- . (1926). *The Sun Also Rises*. New York: Scribner’s.
- . (n.d.). Item:15-1049. The Ernest Hemingway Museum, Finca Vigía, Havana. Quoted by permission.
- . “Household Finances (folder 1-13)”. Ernest Hemingway Collection. John F. Kennedy Library.

<https://www.jfklibrary.org/asset-viewer/archives/MEHC#idm1460745744> (平成 31 年 1 月 19 日閲覧)

- , “Legal and Financial Documents (folder 1-4)”. Ernest Hemingway Collection. John F. Kennedy Library. <https://www.jfklibrary.org/asset-viewer/archives/MEHC#idm1460745744> (平成 31 年 1 月 19 日閲覧)

Hemingway M. (1976). *How It Was*. New York: Knopf.

Heslip, P. (2011). “Guide to the Hemingway Legal Files Collection”. The New York Public Library.

“Institution History of Kennedy Plaza” *National Information Center*.
https://www.ffiec.gov/nicpubweb/nicweb/InstitutionHistory.aspx?parID_RSSD=76201&parDT_END=99991231 (平成 30 年 12 月 26 日閲覧)

Trogon R. W. (1999). *Ernest Hemingway: A Literary Reference*. New York: Carroll & Graf P.